

# 有標性を用いた「それが」の談話分析

福田 明子

## 1. はじめに

有標性は言語学において音韻論や文法論で主に用いられてきた概念であるが、近年では談話研究にも用いられている。窪蘭晴夫(1999)は「言語学の基本概念」として次のように述べている。

有標性 (markedness) とは、物事に基本的なものと応用的なもの、単純なものと複雑なものというような序列が存在するという仮説であり、応用的なものや複雑なものは基本的なものや単純なものを前提として存在するという考え方である。

「一般化」も「有標性」も言語学に特有の考え方ではない。他の科学分野でも一般的に使われる基本概念であり、また学問の世界だけでなく、日常生活でもごく普通に用いられている。

また、『新言語学辞典』(1971: 262)には次の記述がある。

「有標」は特別扱いのものを積極的に示し、「無標」は特別扱いとして認める必要のないものを消極的に示すものであるというふうに理解してよい。

このように有標性は日常生活でごく普通に用いている概念であり、言語においてはある文が文法的であるか非文法的であるかの判断と同じように内省によって有標・無標を判断できるのである。

本稿では「それが」の語の有標性を談話のまとまりの中で見てゆく。「それが」は指示詞と接続詞の両方の機能が連文において見られる語であり、先行研究では両者の違いが連文の特徴を捉えることで明確にされてきた。本稿では違いではなく共通性として「それが」の有標性を見ることで語の分析の視野を広げたいと考える。先行研究の成果と共に「それが」の特徴を示して、語の性質を多面的に見るための分析方法を考える一助となることを目指す。

## 2. 談話分析の観点

野村眞木夫(2000: 112)にはテキストの研究の観点として次の定義がある。

- a. マイクロのレベル：形式的な特徴や語の意味、統語論の範疇を指標として、発話や文相互の関係性を規定する。
- b. メゾのレベル：発話や文の意味・機能あるいは表現類型の範疇を指標としてテキストおよび部分テキストのまとまりの組織を規定する。
- c. マクロのレベル：テキストおよび部分テキストの組織や類型性を指標として

テキストを文化的・社会的あるいは制度的に規定する。現在、「それが」のように語に着目した談話研究はマイクロのレベルでの規定がほとんどである。本稿は有標性を用いてメゾのレベルでの規定を目指すものである。野村眞木夫(2000:118)の「批判的談話分析」の方法を用いてマクロのレベルでの規定を行うことも今後求められる。

### 3. 先行研究

浜田(1993)は「それが」の逆接続語としての側面を具体例を挙げて説明している。接続語としての特徴を初めて指摘したものである。ソレガの特殊性について次の記述がある。

逆接系の接続語のシカシ、ダガ、トコロガなどにはPとQを入れ替えても成立する、いわゆる対称的な用法が存在する。一方、ソレガにはこれが存在しない。

(15) 太郎は風邪をひいている。\*それが、みんなは元気だ。

ところが、

しかし、

(15') みんなは元気だ。\*それが、太郎は風邪をひいている。

ところが、

しかし、

(中略) このように、逆接続語のもっとも典型的とみなしてもいいような用法がソレガには欠けているということがソレガを逆接の接続語のプロトタイプから遠いものになっている。また、結果的に、ソレガが逆接の接続語として扱われることを妨げてきたのかもしれない。

(中略) ソレガの逆接的機能とは「直前のP部の内容から予想される結果とQ部に述べられている内容が異なっていることを、話し手の判断を交えず、物語を語るように、事柄の生起の順に提示することである」と言えるのではないだろうか。

庵(2007)は「それが」の接続詞としての特徴を次のように述べている。

「それが」の持つ予測裏切り性は「それ」の部分への先行文脈からの義務的なテキスト的意味の付与によって生じると考えられる。

また、指示詞と接続詞の「それが」の比較を行っている。

(30) プナは「森の母」であり、プナの森は「命の森」である。命の森は、一万年、いや、それ以上の昔から私たちの祖先の木の文化をささえてきた。それがわずかに数十年で急速に姿を消している。(天声人語1986.8.24)

(31) 太郎君の父長靖さんは16年前の冬、吹雪の尾瀬で凍死した。尾瀬自動車道の建設中止に力をそそいだ長靖さんは、小屋を継ぐことを嫌い、悩み続けたことがある。それがいつか、尾瀬にひきつけられていく。

(天声人語1987.5.25)

(30) が「指示詞」としての、(31) が「接続詞」としての「それが」の例である。両者の違いは「それ」の部分破線部の名詞句を先行詞として差し得るか否かに



多い」(Comrie, 1976a:114)。したがって、相似の指摘は極めて適切である。すなわち、様々な無関係の隣接ペアの第一部分に対する、好ましい (preferred) (したがって無標の (unmarked)) 第二部分は、好ましくない (dispreferred) (有標の (marked)) 第二部分より材料は少ないが、その他の点では相互に共通性がほとんどない。これに対して、様々な無関係の隣接ペアの第一部分 (例えば、問いかけ、申し出、依頼、呼び出し、など) に対する好ましくない第二部分には相互に多くの共通性がある。

誘いとそれに対する対応のペアについて次のように示している。

(50) Atkinson&Drew,1979 : 58

A : Why don't you come up and see me some//times

(時にはぼくのところにこないかい)

B :

I would like to

(うかがいたいわ)

(51) Atkinson&Drew,1979 : 58

A : Uh if you'd care to come and visit a little while this morning

I'll give you a cup of coffee

(今朝もしぼくのところにちょっと寄ってくれるんなら、コーヒー一杯ごちそうしよう)

B : hehh Well that's awfully sweet of you,

《DELAY》《MERKER》《APPRECIATION》

(え、ええ、それはどうもご親切さま、)

《おくれ》《標識》《感謝》

I don't think I can make it this morning.

《REFUSAL or DECLINATION》

(今朝はちょっと無理だと思うんですが。)

《拒否もしくは辞退》

.hh uhm I'm running an ad in the paper and-and uh I have to stay near the phone.

《ACCOUNT》

(あのう、新聞に広告出して、あの、電話のそばにいなきゃいけないんです。)

《説明》

ここで (Atkinson&Drew (1979 : 58ff) が指摘しているように)、最初の例での誘いは、第二部分で受諾される。その受諾は単純な形でなされ、遅れなしになされているだけでなく、実際には部分的に重なっている。それに対して、二番目の例の誘いでは、第二部分に否定ないし辞退が来ている。ここに好ましくない応答の典型的特徴がすべてある。

ここでの好ましくない応答の典型的特徴とは、《おくれ》《標識》《感謝》《拒否もしくは辞退》《説明》で示されることである。

次はこれらの特徴が見られる談話例である。

- 710B えっと、今までのスケジュール、では、何日（なんにち）。  
 →711A →ええーと←ですね、それが非常にかかっておりまして、45日（よんじゅうごにち）ぐらいかかって。  
 712B 45日（よんじゅうごにち）。  
 713B えっと、#####入れて45日（よんじゅうごにち）です★ね。  
 714A →え。←  
 715B 一ヵ月半。  
 716A 一ヵ月半。  
 717A で、それはあの一、こちらもあの一、え一、入稿する、入稿するといって、なかなか入稿しないとかうんで、（ええ、ええ 他者（男））あの一、あっち、あの一、印刷一のほうでも、ダイをとったりとか、そうゆう、のがあるまり、こ一、定期刊行物のわりにはシステムティック、じゃなかった、（はあはあ 他者（男））ってこともあると思うんですね。

『女性のことば・職場編』<sup>1</sup>

これは出版会社の社員Aと印刷会社の社員Bによる雑誌発行の打ち合わせの場面である。この「今までのスケジュール」を話題とするまとまり中にも、好ましくない応答の典型的特徴が見られる。710Bの問いに対して、711Aの応答に見られる《おくれ》《標識》、717Aの《説明》である。711Aには「ええーとですね」で示される発話の遅れがあり、好ましくない応答を示す「それが」という標識がある。717Aの発話は好ましくない応答をすることの説明である。

浜田（1993）の逆接的機能に特徴があるという指摘と、庵（2007）による指示詞の「こ・そ」と助詞「は・が」の組み合わせの中で最も有標であるという指摘に、ここで述べた優先応答の談話において好ましくない応答の標識であるということを加えて考えたい。「それが」は逆接接続語として前件・後件の対立を示すというより、後件が特殊であることを予想させてむしろ前件・後件をスムーズにつなぐ働きをすることができると見ることができる。このことについて、次の談話例で見てゆく。

- 1 B んー。  
 2 B けどほら。  
 3 B まー、（##）市、(0.2) でしょ？  
 4 A で [すね？  
 5 B [だ、ちいさな町だから、  
 6 B それでも、（##）寺さんってゆーと、も、（##）一、市民にとっては、やっぱり一、それなりのね？  
 7 B あの一、格式のある、ところだから一、  
 8 B 一番（##）寺の幼稚園が、園児は多いのかな？  
 9 A そー [なんですか。  
 10B [んー。  
 11A [あ、あ、

- 12B [後は保育所とかー [、色々、あるけれども、やっぱり。  
 13A [えー。  
 14A でも、[そーゆところね、ずーっと、]《発話の重なりに気付いて、止まる》  
 15B [(# #) 寺の幼稚園が、]  
 16A はたらー、気持ちよく [働けてたらね、一番いいですよー？  
 17B [h h h h そーですね、そーですね。  
 18A ねー？  
 →19B だけど、それが、家から通っててわがままし放題でしょ？  
 20A え、[わがままですか？  
 21B [だから、  
 22B わがままですよー。  
 23B [わがままし# #  
 24A [ら、楽ですよー？  
 25B 楽。  
 26B [だからねー、あの、みんながね、職場の人がね、あんまりす、親がね？  
 27A [h h h h h  
 28A ん、ん。  
 29B ほら、面倒見ちゃってるでしょー？  
 30B 良すぎるから、  
 31B [居心地良すぎるから、なかなか行けないんだよって。  
 32A [h h h h h h h h から、  
 33B 言われ [ちゃってるんだけど。  
 34A [言われちゃって。

これは60代女性AとBの雑談<sup>2</sup>で、「子どもの仕事と結婚」を話題とするまとまりである。14A,16Aで「働き方」を評価する発話があり、17Bでは評価への一致を表す発話で受けたあと、19Bでは「生活態度」を非難する発話をしている。この19Bは14A,16Aの評価に不一致を表す一方で、「働き方」を包括する「生活態度」の評価へと話題を変化させていることがわかる。20A~34Aでは「わがまま」「楽」「親が面倒を見ている」「居心地が良すぎる」という生活への評価の言葉が続き、結婚という別の生活を選ぶのが難しい状況であるという意見に導く会話の流れになっている。

S.C.レヴィンソン (1990) の記述で次のものがある。

評価がまず与えられると、それに対しては意見の不一致よりも一致のほうが明らかに好まれる。

そして、不一致の場合について次のように述べている。

典型的にyes,but (そうだけど) の様な形態をもっているか (言い換えると見せかけの一致という前置きのある不一致であるか)、さもなければ、発話が遅らせられるか、wellの様な、ほかの好ましくない行為を表すもので前置きされることになる。

このyes,butと同じ働きを談話中では17B「そーですね」19B「だけど」が担って、意

見の不一致の発話が続くことを予想させる。また、1B~34A「子どもの仕事と結婚」の話題のまとまりの中で、19Bは「働き方」から「生活態度」へ話題を変化させる発話となっている。

このように19Bは意見の不一致と話題の変化とを示す発話であり、「それが」が標識として機能しなくても後件が特殊であることは明らかである。この談話での「それが」の働きを考えるために、19Bの発話と「それが」を除いた19B'「だけど、家から通ってわがままし放題でしょ？」とを比較すると、「それが」は前件・後件をスムーズにつなぐ働きをしていると考えることができるだろう。

## 5. まとめと今後の課題

本稿ではメゾのレベルの観点で談話分析を行うことで「それが」の語の性質を考えた。先行研究では接続語としての特徴や指示詞と接続詞の違いが指摘され、詳細に示されている。このマイクロのレベルでの成果にメゾのレベルやマクロのレベルという別の観点からの指摘を加えることによって、指示語や接続語の連文間での機能をより多面的に見ることができるだろう。本稿はその一助となることを目指した。

今後は、談話における話題のまとまりと有標性の関わりを他の指示詞や接続詞で見てゆくこと、マイクロのレベルでの成果を生かしたメゾのレベルでの分析方法を探すことを課題としたい。

## 【注】

- 1 『女性の談話 職場編』の談話資料の記号は次の通りである。
  - ・発話の途中で、次の話者の発話が始まった場合、次の話者の発話が始まった時点を「★」で示す。また、前の話者の発話に重なった部分は始まりを「→」、終わりを「←」で示す。
  - ・発話途中の聞き手のあいづちは、( )に入れて示す。
  - ・イントネーションについて、上昇は「↑」、疑問下降は「？」で示す。
  - ・聞き取り不明の箇所は「#」で示す。
  - ・分析において注目する行は左端に矢印「→」を付して示す。
- 2 ここでの雑談の談話資料の記号は申田秀也・定延利之・伝康晴 編(2007)の共通転記記号をほぼ踏襲しており、次の通りである。
  - ・[ 左角括弧は、二人以上の発話や音声为重なり始めた時点を示す。  
] 右角括弧は、発話や音声の重なりが終了した時点を示す。
  - ・(数字) 丸括弧内の数値は、その位置にその秒数の間隙があることを示す。
  - ・? 疑問符は、直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。
  - ・h 小文字のhは呼気音を示す。呼気音の相対的長さはhの数で示す。この記号は「ため息」「笑い」などいくつかの種類の異なるふるまいを示す。
  - ・# 聞き取り不明の部分は#で示す。固有名称を伏せる場合は丸括弧の中に入れて(#)で示す。

- ・→ 分析において注目する行は左端に矢印を付して示す。
- ・《文字》 転記者によるさまざまな種類の注釈・説明は、二重丸括弧で囲って示す。

### 【参考文献】

- 天野みどり (2015) 「格助詞から接続詞への拡張について—「が」「のが」「それが」—」  
『文法・談話研究と日本語教育の接点』
- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』 くろしお出版
- 串田秀也・定延利之・伝康晴 編 (2007) 『時間の中の文と発話』 ひつじ書房
- 窪園晴夫 (1999) 『現代言語学入門2 日本語の音声』 岩波書店
- 現代日本語研究会編 (1999) 『女性のことば・職場編』 ひつじ書房
- 寺井妃呂美 (2008) 「「ソレガ」の論理関係について」『日本語文法学会第9回大会発表予稿集』 日本語文法学会
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』 ひつじ書房
- 浜田麻里 (1993) 「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』 3 国際交流基金日本語国際センター
- 松浦恵津子 (2007) 「接続詞「それが」の意味用法について」『マテシス・ユニヴェルサリス』 8-2 獨協大学外国語学部言語文化学科
- 安井稔編 (1971) 『新言語学辞典』 研究社出版
- レー・バン・クー (1988) 『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』 くろしお出版
- Comrie, Bernard. 1976. Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子訳1990『英語語用論』 研究社出版)

(平成20年度 修了生)